

因果・時間・同時性

平井靖史（福岡大学）

因果性および時間に関する物理学の見解と現代哲学者の知見、そして日常的理解との間によこたわる乖離を、どう統合すべきか。課題は山積しているように思われる。本発表では、形而上学の伝統の中から、当該問題の再検討に有益である可能性を持つと発表者が考えるものを三つとりあげる。

A 四原因説の再吟味

因果性を一義的なものとして維持しうるか・すべきかという点について意見が分かれており、その検討に当たって、四原因説の（とりわけ時間性の観点からの）再吟味は無駄なことではないと思われる。C・F・V・ヴァイツゼッカーによる〈形相因〉の解釈、ハワード・パッティによる組織階層性の見地からの物理と（下向き）因果の接続の試み、Ned Hall による産出と依存の組み合わせの議論などを概観する。

B 時間のいわゆる「計測不可能性」について

世界の中の一運動体にすぎない時計が、他の運動体の運動を計測する基準として用いられるのは、その運動の周期的斉一性のためであると言われる。しかし、そもそもそれが「周期的・斉一的」であるのは、どのようにして保証されるだろうか。諸〈同時性〉間の「間隔」としての「時間量」が実在するという見地をとるとしても、時計の運動量をこれと比較することは原理的に出来ない以上、結局は、時計の運動の斉一性の判定は、運動体同士の相対的な比較に基づくしかないのか（たとえば原子時計は何に対してズレるか）。絶対時間も規約的にしか同定できないというこの（疑似）パラドックス自体が、その根底において、〈同時性の仮定〉に基づくことを確認する。

C 分割不可能な持続単位について

B の論点を引き継ぎつつ、「運動の軌跡は分割可能だが、運動そのものは分割されえない」という議論（ベルクソン・植村恒一郎）を再検討する。「可能的分割」と「現実的分割」の区別に基づいて、「可変的ではあるがこれ以上分割できない持続単位」として運動を認める点で、先の〈同時性の仮定〉に対立する議論になっていることを示す（ミラヴェット）。「幅を持つが分割不可能な時間単位」というアイデアは、デカルト・ライプニッツにも見られるが、現在時間意識の分析において Dainton らが採る extentionalism との関連についても簡単に触れる予定である。